

第13回中部MISt研究会 イブニングセミナー

成人脊柱変形の矯正術 - 低侵襲化への試みとこだわり -

日時

2022年 **6月23日（木）** **17:15~18:15**

会場

富山国際会議場 第1会場メインホール

座長

高橋 淳 先生

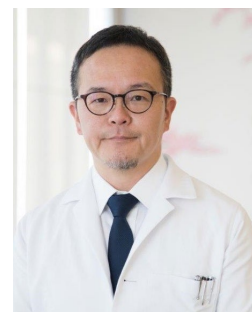
信州大学医学部運動機能学教室
教授



演者

福田 健太郎 先生

済生会横浜市東部病院
院長補佐/運動器センター長/整形外科部長



成人脊柱変形の矯正術 - 低侵襲化への試みとこだわり -

済生会横浜市東部病院 福田健太郎

成人脊柱変形(ASD)の矯正固定術、特に胸椎から骨盤に至る長範囲固定術といえ、かつては平均で数千mlの術中出血が見込まれ、時に生命に関わるような重篤な合併症をきたすような大手術であった。またその苦勞の割には治療成績も決して満足のものばかりではなかった。2010年にSchwabのフォーミュラが報告され、その数年後からspino-pelvic harmonyの概念がわが国でも流布して以降、ASD矯正固定術に対する認識は大きく変わってきた。さらに、経皮的椎弓根スクリュー(PPS)システムや小皮切側方進入腰椎椎体間固定術(LLIF)の導入により、脊椎固定術の低侵襲化が進められたことは大きい。ごく一部の施設の限られた術者によってのみおこなわれる手術だったASD治療の裾野が広がることは歓迎すべきことである。しかし「従来式のアプローチで高侵襲な矯正手術をしてきた術者が低侵襲化を目指しておこなう手術」と「今まで矯正手術をしてこなかった(学んでいない)術者が低侵襲手技やそれを謳ったインプラントを武器に脊柱変形に手を広げた手術」とで、対象となる患者は同じはずなのに異なった手術となっははいないであろうか。低侵襲にこだわるあまり、変形「矯正固定」術において大切なことがおざなりにされていないであろうか。

立位バランス不良を主訴とするASDに対する矯正固定術の目的は、変形を矯正して至適なグローバルアライメントを獲得することのみならず、獲得したアライメントを維持して強固な骨癒合を得ることにある。そのために必要なことは、十分な可撓性の獲得と適切な骨移植、そして慎重な後療法であると予めから論じてきた。演者がこれまで取り組んできたASD矯正固定術の低侵襲化とこだわりについてお話させていただくことが、参加される先生方のお役に少しでも立てば幸いである。